

P154 Life as a River 川としての人生

A banal example: think of life as a river. People can do all kinds of things in a river, they can drift, that is to say, follow the circumstances. Then they are spit out where the river wants to spit them out. Then another merciful wave comes along and takes them along for awhile then spits them out at another place where they do not want to be. Then then think they are the victims of circumstances of the river.

よくあるたとえですが、人生を川と考えます。人びとは川の中でいろいろなことができます。漂流すること、つまり、状況に従うこともできます。そうして、川が吐き出したいところに吐き出されるのです。そうするとまた別のありがたい波がやってきて、彼らをしばらくの間連れて行きますが、そのうちまた別の、行きたいわけでもないところに吐き出します。すると彼らは、自分たちは川という境遇の犠牲者だと考えるのです。

この章(第15章)のテーマは”Style of Life”。とすると、これも Style of Life の話と考えます。(資料1.) この段落だと、川(境遇)とどう付き合うか、これに Style of Life が現れていると考えられます。川に流される style of Life, 川に流されておいて、「自分は川という境遇の犠牲者だ」というのもまた style of Life、ということでしょうか。

It is also possible, however, for people to go in where they want to, taking the current into consideration. They can swim and get out approximately where they want to be, in other words, they consider the circumstances of the river and create their own movement. They are not pieces of driftwood that get pushed along or get stuck somewhere. These pieces of driftwood are the people who “could be” and when they are old, talk about “what they could have been.” These are the drifters which we see in neurotics and other kinds of people in difficulty.

けれども、流れを考慮して自分の行きたいところに行くこともまた可能です。泳いで、行きたいところの近くに出ること、つまり、川の状態を考えに入れて自分の動きを作り出すこともできるのです。彼らは、押し流されたりどこかにはまり込むような流木のかげらではありません。こうした流木のかげらは、「かもしれない」人びとで、年をとると「自分はこうだったかもしれない」ことについて話すのです。これは、われわれが神経症者や他の困難に遭っている人たちに見ることができる、漂流者です。

「流れを考慮して自分の行きたいところに行く」というのもまた Style of Life のひとつ。

「流木のかげら」は、先に出てきた「自分たちは川という境遇の犠牲者だと考える」人たちのことと考えられます。こういうのを「漂流者(drifters)」の Style of Life だとジッハーは言っているのでしょう。

(ディスカッションの中で、「自分たちは川という境遇の犠牲者だと考える」人たちのこと、というわけでもないのではないか、重なっている人も多いと思うけれど、というお話ができました。確かにそうだと思

います。)

This is very important to keep in mind. Otherwise, we might conclude that we are either the victims of our heredity or the victims of the circumstances of our environment. We forget that we have a say in what we want to use, in accord with our heredity. We can say what we want to use of our circumstances, and in which way we want to influence our environment.

このことを心に留めておくことはとても重要です。でないとなれわれは、自分を遺伝の犠牲者だとか自分を取りまく境遇の犠牲者だと決め込むかもしれません。われわれは、遺伝に従った (沿った) 上で、自分が使いたいものの中で発言権があるのだということを忘れてしまいます。われわれは、自分の状況の中で使いたいもののお話しをし、どのように環境に影響を与えたいかの話をする事ができるのです。

「自分を遺伝の犠牲者だとか自分を取りまく境遇の犠牲者だと決め込む」というのはアドラーのいわゆる劣等コンプレックス、あるいはその前段階のように思われます。または、いわゆる「かわいそうな私」でもあるかも。

「遺伝に従った (沿った) 上で、自分が使いたいものの中で発言権があるのだ云々」というのは、アドラーの言う「与えられたものをどう使うかだ」ということと似ているように思います。あるいは「やわらかい決定論」と考えることもできると思います。

(ディスカッションの中で、in accord with our heredity は「遺伝に沿った」とするのがよいのではないかという話が出ました。)

This is critical in dealing with people who have gotten sidetracked. In order to bring them back to the main track they will have to learn one of the most difficult social implications of being human. This implication is the role they play in others' lives, to function where they now stand, and the difficulties that arise by not wanting to play a role at all.

このことは、脇道にそれた人びとと関わる時に重要です。彼らをもと線に戻すためには、彼らは人間であることの一番難しい社会的な意味の一つを学ばなければなりません。その意味とは、自分が他人の人生において担う役割で、自分が今立っている場での働きをすることであり、役割を果たす気なんてまったくないことによって生じる困難なのです。

「脇道にそれた」というのは、アドラーがいう、人生の useful な面です。生きる、の反対、useless な面です。生きることを言っているのかなと思います。(資料 2.)

「人間であることの一番難しい社会的な意味」というのは、アドラーがいう”iron logic of communal life” に近いように思います。(資料 3.)

(ディスカッションの中で、「implication を「意味」と訳しているが、imply は本来、含みを持つ、という含み (!) があるので、含み、というような訳もよいのではないか」というお話が出ました。)